

# 視察先別報告 東ティモール

## 【草の根技術協力】

沖縄・東ティモール 地域力強化を通じた紛争予防協力

### 概要

地域力強化を通じた取り組みによりディリ市内のコミュニティにおける紛争を予防することを目的とするプロジェクト。ディリ県コモロ村における国防治安省コミュニティ紛争予防局の紛争分析能力及びコミュニティとの関係強化、コモロ村の協同ラジオを通じて住民間や行政の相互理解及びコミュニケーションが改善されることを目指す。沖縄県読谷村及び特定非営利活動法人沖縄平和協力センターが実施している。

01

大浦 正人 日本は平和です。平和の為には何が必要ですか、と問われても特に何かが必要とは思いません。平和はそこにあるからです。まさにこの国は、つい先ほどまで平和ではない状態で数万人の命がなくなりました。この活動は、若者が運営の担い手となるコミュニティラジオを村内に設立して、彼らにギャングに所属する以外の活動を与え、彼らが紛争の当事者になる可能性を下げ、交流の場（ラジオ）を提供して連帯意識を強めていくものです。地域住民の事業に対する理解度（事業目的、計画）はあまり高くないように思われましたが、このような活動は結果として平和に繋がっていると思います。

02

太田原 奈都乃 沖縄県読谷村とディリ市コモロ村。地理的環境、統治・独立・自治の歴史的背景といった類似制を活かし、沖縄はコモロ村地域住民が主体となった紛争予防協力を実施している。その一つがラジオ番組制作だ。私は「未来世代」である若者が主体であることに可能性を感じた。例えばある日のトピックは村のゴミ問題。地域が抱える問題をありありと提起する。コモロ村約9000世帯のうち約半数がアクセスできるラジオを通じた紛争予防策は、若者にやりがいのある活動を見つけれられた若者自身だけでなく、日常的な争いごとに悩まされるリスナー、地方から移住してきたリスナーなど多くの村民にとって価値あるものだと思う。今後は、リスナーからのフィードバックや提案などの相互的な制作システムを充実させていってほしい。

03

川辺 絵梨 コミュニティラジオの活動に、ジャーナリスト志望の19歳の少女が参加していた。この少女は元々このような夢を持っていたが、コミュニティラジオの存在は住民の情報共有の場だけでなく、住民自らがラジオ運営に参加することによって社会参加の足掛かりとなり、生きがいを感じたり夢を抱いたりするきっかけの場となることが分かった。ここでの経験を活かし、大きく羽ばたいていく若者が現れてくれることを期待する。しかし、多くの若者にとってそのような場にするには、時間を掛け実績（良い事例）を挙げていく必要がある。故に、ある程度の実績が得られるまで、長期的な支援が必要だと感じた。

04

木村 みゆき はじめに沖縄と東ティモールの関係を知る事ができた事が大きかったです。沖縄と東ティモールの歴史的背景が似ている事や沖縄の地域作りをモデルにコモロ村のラジオをツールとしたコミュニティ作りが行われた事などを考えると、沖縄平和協力センターの樋口調整員が地域に寄り添い良い関係があるから成り立っている事業だと思えます。今でも危ない地域であり警察への不信感もある中でコミュニティポリスを作った事で紛争が少なくなっているという現状と日本と東ティモールの連携に感謝するというエウリク村長からのお言葉を頂くことができました。今後も紛争予防の取り組みを展開し自治されていくことを願います。

05

後藤 恵美 本案件は、事前のリサーチではその活動の背景や趣旨、目指すところがあまり理解できなかった案件である。実際にNGOを訪問して担当者から説明を受け、紛争とは国や地域間の大きなものだけでなく、コミュニティ内の喧嘩や治安悪化なども指し、またそれらの多くは若者たちが生きがいや目標を持つことが出来ないことに起因するということを知った。さらにその解決方法の一つとしてコミュニティラジオ局を運営するというアイデアにも感心させられた。自前のラジオ局は、現在建設中であり、今のところ他社の一部を間借りしながらの細々とした取り組みではあったが、少しずつ、しかし確実に地域や若者たちを巻き込みながら活動の幅を広げている様子を知ることができ、感銘を受けた。

06

塩澄 志麻

「草の根技術協力事業で取り扱われる案件は、予算を多く積んだからといって解決できる課題ではない」そう気づいた取り組みだった。人口約4万人のコモロ村。そこには、無差別に人を殺す事件が起きる危ない場所だった。

その様な村で、地元の人と活動する沖縄平和協力センターの樋口調整員。村にコミュニティラジオをつくり、現地の若者がラジオ番組の企画から発信まで行う。若者は、このコミュニティラジオ運営の経験を得て、職に就き、自立している。また、地域の人々の生の声を発信するラジオは、人々に気づきを与え、家族やリスナーなど村のコミュニティを活性化している。東ティモールの人と人をつなげていく支援は、決して資金の力だけでは行えない。

07

武田 義久

歴史的背景が共通している沖縄と東ティモール。地元のラジオをツールとした地域力強化を通じて、コミュニティの紛争の予防を行っている。若者の意識を変えていこうと意気揚々としている樋口調整員の姿は眩し過ぎた。コモロ村との連携の中で、特に警察への信頼が未だ薄いと感じた。これはインドネシア占領時代からの歴史的背景が大きいと言われている。今はコミュニティポリスのプレゼンスが非常に大切であると感じた。コモロ村長から日本からの事業協力への感謝と連帯スピリットを持ちながら今後も東ティモール政府と日本政府の協力を密にしていきたいという言葉があった。そこに、ODAの成果と期待があることを確信した。今後は、事業の持続性と現地スタッフのキャパシティービルディングが課題であると感じた。

08

田中 香織

コモロ村村長にわざわざご対応いただき、当プロジェクトを通じてOPAC及びJICAのコモロ村への貢献が評価されていると感じた。お話の中で、1999年、2006年の紛争でも問題となった警察に対する市民の不信感が、今でも払拭されていないという点は印象深かった。しかし、地域の中にコミュニティポリスと呼ばれる警察官を配備し、地域での紛争には地域住民とOPACと連携し解決する仕組みが構築されており、警察や地域住民同士の信頼関係が少しずつ高まっているのではないかと感じた。コミュニティラジオでも、若者たちが将来の夢や自らの楽しみのために集い、楽しそうに働いていた。資金面など活動を継続していくには課題も多いとは思いますが、地域住民が集う公民館のような役割を果たし、地域コミュニティの絆が強まっていく可能性を感じた。

09

藤島 誠人

このプロジェクトでは、コモロ村において、若者に役目を与えて紛争を予防し、紛争（喧嘩）をする若者を減らしていくことを目的に実施している。プロジェクトにかかわる若者は実際に自分たちでネタを探し取材をし、ラジオという媒体を通してニュースなどで発信していく。番組はニュースの他にもおたよりコーナー（SMSの読み上げコーナー）や村長の話、アーティストなどのトークショーなどがある。何もすることがなく、喧嘩ばかりをしているような若者も、1人1人がやりがいや責任を感じて仕事に取り組むようになり、少しずつ紛争予防に繋がることをプロジェクト関係者は期待している。また、若者はこのラジオの仕事を通して、自分の夢を実現していることに誇りを感じていた。

10

藤岡 裕巳

はじめは紛争予防になぜラジオなのか疑問であった。コモロ村では6,000世帯の半分はラジオを持っており、かつ、携帯電話がラジオになるということで大半の人がラジオを耳にする機会があるという。情報発信をする人が同じ若者であることでリスナーの興味関心は高まる。内容はニュース・お便りコーナー・インタビュー・トークショーなど豊富で、その企画から取材活動までボランティアで集まった若者が行っているようだ。特にジャーナリストを目指している若者にとってこの経験は大きく貢献していると感じる。ラジオ局が若者を集める手段となり、そこから発信される情報がさらに若者の心を動かす。その声が、これからもコモロ村の若者に継続して届いて欲しいと願う。